九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

南北市糴考 ： 弥生時代対馬舶載朝鮮製青銅器の意味

下條, 信行

https://doi.org/10.15017/2235184

出版情報：史淵. 116, pp.175-210, 1979-03-31. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

南北市羅考

—弥生時代対馬舶載朝鮮製青銅器の意味—

下條信行

一、はじめに

玄界の孤島対馬は朝鮮半島と日本（北部九州）の中にあって、古来から両地域の文化を結ぶ飛び石としての役割を担ってきた。その起源は、現在のところ縄文時代早期にさかのぼり、朝鮮半島南岸の慶尚南道釜山市影島区東三洞貝塚の最下層の土器と上県郡上県町越高遺跡出土の土器が共通の隆起文土器であることから知ることができる。(1) こういった関係はその後の縄文時代を通して継続されたようで、縄文時代後期の志多留貝塚の石鏃が先述東三洞貝塚に出土することも、その一例証とすることができよう。(2)

時代が降って弥生時代に到ると、中国・朝鮮の大陸系文化の南下が盛んになり、従来にまして対馬の役割は一層重要さを増してくるようになった。その頭初には朝鮮半島からの稲作文化とそれに共伴した大陸系磨製石器、後続して弥生時代の前期末から中期中葉にかけて朝鮮舶載の細形銅剣、銅矛、銅戈、多鈕細文鏡あるいは無文土器、中期中葉から後葉にかけては前漢鏡、ガラス璧、金銅製四葉金具や蓋弓帽などの中国製文物、後期にいたると方格規矩鏡や「長宜子孫」連弧文鏡などの中国の漢中期から後漢の文物が北部九州の地に運送伝播された。

この伝播過程には、必らず対馬が経由地になり、対馬島にも少量であるが、以上の朝鮮・中国製の文物をのこすことになる。それのみならず、魏志倭人伝の対馬の条項記載のように「南北に市糴す」るのを生業の一つにしていた以

上、対馬島民（海民）が日本で貴重視されていた前述の文物の移動に積極的に関与していたであろうことは推測にあまりあるものといえよう。

このような生活形態を生業にしていた対馬海民の実態については、古くは鳥居龍蔵博士などによる志多留貝塚（上県町）の調査、東亜考古学会による同貝塚や賀谷洞穴（美津島町）の調査[3]、対馬遺跡調査会の佐賀貝塚や吉田貝塚（峰町）の発掘によってしだいに明らかにされてきた[4]。また同島の永留久恵・阿比留嘉博氏等による井手遺跡（峰町）[5]、ハチマンノダン（上県町）の発掘も対馬島民の内陸的生活を明らかにするのに貴重であった。さらに最近の坂田邦洋氏等による一連の発掘成果も見逃がすことはできない[6]。筆者も対馬島民の内的生活を追求する試みとして、厳原町豆酘で生活関連遺跡を発掘したことがある[7]。

こうした古代対馬島民の生活型を追求する作業と共に、対馬が日本考古学の上に瞠目されてきたのは、本稿がとりあげる埋葬あるいは埋蔵遺跡に出土する特異な青銅器のゆえであった。特異というのは、一つには日本には出土を見ない用途不明または特殊な形態の青銅器が出土することであり、一つには日本で製作された中広・広形の銅矛が異常な多量さで発見されることであった。すなわち銅器の島として関心を集めたのである。

その嚆矢となったのは鳥居龍蔵氏によって知られた佐護白岳出土の銅器類で[8]、つづいて後藤守一氏によって紹介された[9]佐護クビルの銅矛、銅鏃であった。白岳遺跡の把頭飾は折からの朝鮮考古学の進展によって、朝鮮半島に出土するものと同一品あることが確認され、対馬と朝鮮半島との間には、北九州には見ない文物の交流が古代からあったことが注意されるようになった[10]。

クビル遺跡の評価については、後藤氏の努力にもかかわらず、不明の点も残されていたが、そのご金関恕氏によって鏃の製作地が平壌付近に考えられると推定されるようになり[11]、対馬銅器の出自に一定の解明を与えた。また最近小田富士雄氏によって、遺構の時期や性格について、新らしい見解が示された[12]。

爾来敗戦まで目だった発掘はないが、昭和23年に行なわれた東亜考古学会による対馬の総合調査はその課題の一つとして対馬出土の国産銅矛の調査と聚成を行ない、弥生式土器からの見解とも絡めて対馬は基本的に弥生文化の領域に含まれることを明らかにし、その上にたって白岳遺跡の角形銅器と金海貝塚出土の鹿角製刀子柄の類似性に見られるように両者の交流が行なわれたことを明らかにしている。[13]

昭和38年対馬遺跡調査会によって、峰町タカマツノダン、同サカドウ両遺跡の出土品が発表されたが、これはある意味で戦後対馬青銅器研究の起点をなすものであった。[14]遺物の出土状態は不明であったが、その出土品に多くの朝鮮舶載の青銅器を含み、なかでもサカドウ出土の平環やタカマツノダン出土の半球形飾鋲は慶尚北道漁隠洞遺跡出土品と同種のもので、[15]対馬が朝鮮、中でも南朝鮮と密接な関係にあったことを明らかにした。

秋山進午氏は朝鮮半島の青銅器を整理して対馬の青銅器が南朝鮮の青銅器文化の延長上にあることを確認している。[16]

以後これを受けて、地元の研究者の舶載青銅器への理解と認識も深まり、豊玉町佐保でソウダイ、[17]シゲノダン、唐崎[18]など舶載青銅器の出土が相ついだが、これらは偶々の発見であっても、事後調査がすみやかに行なわれるようになり、遺構や遺物の出土状態も明らかになりはじめた。昭和42年、筆者はシゲノダン、唐崎の事後調査に森貞次郎博士に随行し、その際見聞した遺物の出土状態の奇異さに驚ろき、それが今回の筆の起因になった。

昭和43年以後、地元の永留久恵、阿比留嘉博氏らと長崎県、長崎大学、九州大学と共同で、美津島、豊玉、峰町の弥生―古墳期を主体とする浅茅湾沿岸の考古学的総合調査が行なわれ、多くの成果を得た。[19]昭和49年に刊公されたその報告書中で武末氏は対馬の舶載青銅器をとりあげ、その多くが南朝鮮に起源を持つことを指摘し、日本青銅器の原料にもなった可能性があることを予感した。[20]また、この調査行が背景にもなって、高倉洋彰氏は朝鮮―対馬―日本を結ぶ小形仿製鏡の連繋の道があることを明らかにした。[21]このころ岡内氏は朝鮮・対馬に出土する剣把頭飾をとりあ

げ、南朝鮮の把頭飾と対馬のそれとが同一文化範疇にあることを指摘し、更に南朝鮮での銅器の儀器化を認め、文化的にも同質関係にあるとした。[22]

その後昭和49・50年に永留氏や坂田邦洋氏らによって、峰町恵比須山、[23]同トウトゴ山、[24]同木坂[25]で出土状態を明らかにした青銅器を発掘し、対馬青銅器の出土の特異性を明らかにした。

本稿では、先述したような契機をもとに、対馬青銅器の特異性とその原因を明らかにしようとするものであるが、その多くは朝鮮と対馬の比較についやされた。後段の対馬舶載青銅器と日本の銅器との関連をもって終結するものであるが、紙数の限りもあるので、いつか稿を新たにしたい。

【註】

（1）坂田邦洋『韓国隆起文土器の研究』一九七八。
（2）坂田邦洋「志多留貝塚」『対馬の考古学』一九七六。
（3）水野清一、岡崎敬『対馬』東方考古学叢刊、一九五三。
（4）曽野寿彦、増田精一「長崎県吉田遺跡」『日本農耕文化の生成』一九六一。
（5）永留久恵ほか「対馬の歴史」『新対馬島誌』一九六四。
（6）坂田邦洋「住吉平貝塚」「吉田貝塚」『対馬の遺跡』一九七五。
（7）丘陵先端に設けられた弥生後期の自然溝に推積した包含層で、甕形土器が多い点が注目される。弥生土器の中に最終期の無文土器が含まれて、日本の土器と無文土器の編年関係を明らかにするのに役だつ。
（8）後藤守一「対馬瞥見録」（その二）考古学雑誌十三―三、一九二三。
（9）後藤守一「対馬国上県郡佐須奈村発掘品」考古学雑誌十二―八、一九二二。
（10）梅原末治『南朝鮮における漢代の遺跡』大正十一年度古蹟調査報告第二冊　一九二五。
（11）金関恕「天理参考館蔵の銅鋌と銅鈑」朝鮮学報49、一九六八。
（12）小田富士雄「対馬・クビル遺跡の再検討」『考古論争』一九七七。

(13) 註（3）に同じ。
(14) 対馬遺跡調査会「長崎県対馬調査報告」(一)考古学雑誌四九―一、一九六三。
(15) 註（10）に同じ。
(16) 秋山進午「楽浪前期の車馬具」『日本考古学の諸問題』一九六四。
(17) 永留久恵「対馬・豊玉村佐保発見の馬鐸・巴形銅器調査報告」九州考古学32、一九六七。
(18) 森貞次郎ほか『長崎県対馬―豊玉佐保シゲノダン・唐崎の青銅器を出土した遺跡の調査報告―』長崎県文化財調査報告第8集、一九六九。
(19) 九州大学考古学研究室編『対馬』長崎県文化財調査報告書第17集、一九七四。
(20) 武末純一「船載青銅器について」註19所収。
(21) 高倉洋彰「弥生時代小形仿製鏡について」考古学雑誌58―3、一九七二。
「半島↕対馬↕北九州」対馬風土記8、一九七二。
(22) 岡内三真「金海良洞里出土遺物について」史林56―3、一九七三。
(23) 坂田邦洋・永留史彦『恵比須山遺跡発掘調査報告』長崎県峰村教育委員会、一九七四。
(24) 坂田邦洋『対馬の遺跡』一九七五。
(25) 坂田邦洋『対馬の考古学』一九七六。

二、対馬出土の船載青銅器の時期

対馬の墳墓は一般に島に豊富に産する砂石によって石棺をつくるが、その習は縄文時代末～弥生時代初頭に始まり古墳時代に及んでいる。そのことは、しばしば石棺に副葬される北九州系の土器の形式によって知ることができる。ここでとりあげようとする青銅器は多くはこれらの石棺の中に埋納されるが、結論的にいえば、次の様な特徴を持っている。

一、弥生時代の後期に属し、箱式石棺より出土することが多い。

二、その類品は朝鮮半島に出土するが、北部九州の墳墓に伴なうことはない。

三、本来組み合わさるか、対をなすことによって機能するものが、遊離・分離した状態で納められ、実用の役をなしていない。この点朝鮮半島とも出土状態を異にしている。

本章ではこの中で、こういった特徴を持つ青銅器の出現と存続した時期についてとりあげることとする。

対馬の弥生時代遺跡の全体的動向から言うと、特に墳墓においては前・中期に貧弱で、後期において繁栄的である。朝鮮舶載青銅器を出土する石棺は大むねこの後期に属している。既述のように土器を伴なう例が多いので、それを基準に編年すると第1表のようになる。(1)

黒木南鼻、佐保赤崎2号（豊玉町）、恵比須山6号、木坂7号（峰町）塔の首2・4号には対馬で墳墓の副葬用として最も普遍的に使われた弥生式の袋状口縁長頸壺形土器を共伴している。この壺は口縁袋部の屈折点にすでに稜がついており、この特徴からは弥生後期の前半の時期に置くことができる。剣把頭を出土した小姓島5号石棺には袋部が丸いままの古式のものと、屈折部に稜がつきはじめた新らしい時期のものとが共伴出土している。古い形式の土器も残っているが新形式の段階に近づいており、後者の時期をとるとぎりぎり後期の初頭期に置くことができる。(2)青銅器を出す対馬の遺跡としては最古のものである。

木坂5号と観音鼻2号石棺は西瀬戸内に起因する長頸壺を出土し、小姓島より新らしい時期にある。観音鼻例のほうが長頸化とが丸底化が進み、木坂よりも新らしく、弥生終末期におくことができる。木坂はややさかのぼって後期後半代に位置する。本章冒頭の三つの条件を満足させているのは、今のところ木坂5号で最後である。

また土器は伴わないが、出土遺物から時期を推定できるものも多い。シゲノダン（豊玉町佐保）は貨泉を出土し、壱岐原の辻遺跡の貨泉を共伴した(3)包含層の土器から推して、後期前半～中頃にかけての遺跡と見れる。恵比須山6号石棺は変形細形銅剣と後期前半の土器を伴っているので、変形細形銅剣と飾鉄を出土した東の浜（豊玉町）もほぼ同時

第1表　対馬弥生遺跡編年

	生活遺跡	墳墓
前期	吉田貝塚 曽住吉平 井手 賀谷洞穴	泉 （有柄式磨製石剣）
中期		恵比須山10号石棺 （前漢鏡） 櫛エーガ崎 小姓島2号石棺
後期	オテカタ	小姓島5号 黒木、赤崎2号 恵比須山6号、木坂7号 塔ノ首2、4号、シゲノダン 唐崎、タカマツノダン、サカドウ 東ノ浜、白岳 （舶載青銅器群） 塔ノ首3号 木坂5号 観音鼻2号

サカドウ（峰町）は中細銅矛を舶載と見るか仿製と見るかによって時期が異なってくるが、銅剣や触角式把頭金具はタカマツノダンに類似するが、やや後出形式で、後続する時期が考えられる。唐崎（豊玉町佐保）出土の壺の下半部は袋状口縁系統の土器であるが、同出の銅器にサカドウ・タカマツノダン・木坂5号と類似するものが多い。佐保ソウダイは馬鐸と巴形銅器を出土し馬鐸はシゲノダンに共通する。巴形銅器も弥生後期前半の唐津市桜馬場遺跡の出土例から考えても、後期前半期に置くのが妥当といえる。(7)

期のものと考えていい。佐護白岳（上県町）も変形細形銅剣を出土し、シゲノダン、東ノ浜、恵比須山6号石棺と同時期と見られる。伴出の有鉤銅釧から見ても妥当な時期である。(4)

タカマツノダン（峰町）出土の小形仿製鏡は佐保赤崎・東ノ浜と同一のグループに属し赤崎の土器からしても後期前半の時期が考えられる。また慶尚北道漁隠洞(5)と同型の仿製鏡が佐賀県二塚山で後期初頭の甕棺に伴い、(6)これの時期とも矛盾しない。馬鐸や飾鋲はシゲノダン、東の浜に出土し、こちらの面からも時代を限定できる。

こうして、青銅器を出す遺跡の多くは、弥生後期の前半代とそれに後続する時期に集中することが明らかになったが、その下限の幅については検討の余知がある。

この前半期のものと、後半期の木坂5号石棺出土品とを比較すると種類、形式において基本的な相違を見いだせない。特に唐崎やサカドウに共通するものが多く有孔十字形金具・角形銅器・笠頭形金具・双頭環状金具などは後期全期を通じて朝鮮半島より、長らく舶載してきたものとみられる。

【註】

（1）この章に登場する遺跡の典拠は左記による。一括して標示しておく。

九州大学編『対馬』長崎県文化財調査報告第十七集、一九七四。

黒木南鼻　佐保赤崎　塔の首　小姓島　観音鼻遺跡

森貞次郎ほか『長崎県対馬』長崎県文化財調査報告第8集、一九六九。

シゲノダン　唐崎遺跡（豊玉町佐保）

後藤守一「対馬国上県郡佐須奈村発掘品」考古学雑誌十二―八、一九二二。

佐護白岳遺跡（上県町）

対馬遺跡調査会「長崎県対馬調査報告」㈡　考古学雑誌四九―一、一九六三。

タカマツノダン　サカドウ遺跡（峰町三根）

永留久恵ほか『新対馬島誌』一九六四。

東ノ浜遺跡（豊玉町仁位）

永留久恵「対馬豊玉村佐保発見の馬鐸・巴形銅器調査報告」九州考古学32、一九六七。

ソウダイ遺跡（豊玉町佐保）

坂田邦洋・永留史彦『恵比須山遺跡発掘調査報告』峰村教育委員会、一九七四。

恵比須山遺跡（峰町吉田）

坂田邦洋『対馬の考古学』一九七六。

木坂遺跡（峰町木坂）

（2）袋状口縁長頸壺は福岡市博多区板付遺跡では弥生後期初頭期に下がる可能性のある甕を伴い、後期とぎりぎりのところで関係している。

（3）水野清一・岡崎敬「壱岐原の辻弥生式遺跡調査概報」『対馬の自然と文化』所収、一九五四。

（4）杉原荘介・原口正三「佐賀県桜馬場遺跡」『日本農耕文化の生成』所収、一九六一。

（5）藤田亮策・梅原末治・小泉顕夫『南朝鮮における漢代の遺跡』大正十一年度古蹟調査報告。二冊　一九二五

（6）佐賀県教育委員会『二塚山遺跡群』一九七七。
岡崎敬ほか『立岩遺跡』一九七七。

（7）註（4）に同じ。

三、舶載青銅器の種類と朝鮮・日本との関係

a　舶載青銅器の種類と朝鮮との関係

対馬に出土する舶載青銅器には中国製と朝鮮製品とがあり、前者の種類は少なく、後者は圧倒的に豊かである。前者の遺物には前・後漢鏡と貨泉があるが、朝鮮製品と同等の取扱いを得たとは限らない。後者の場合も必らずしも、朝鮮製品だからといって一括できるものではない。その遺物の出自国の違いよりも、北部九州での需要の高さによって扱いを異にしている。以下個別に検討する。

❶鏡　中国鏡と朝鮮鏡がある。前者は註(1)に示すような出土例があり、[1]前漢・後漢の時期にわたっている。弥生中・後期に継続して出土し、他の朝鮮舶載青銅器のように、殊更後期に限定されるということはない。またこれらの鏡は同型のものが、北部九州の中後期に出土し宝器としての扱いを受けている。下ガヤノキ出土の連孤文鏡[2]は銘文を異

第2表　対馬出土舶載青銅器出土一覧

	対馬（弥生後期）	朝鮮南部	朝鮮北部	日本（弥生後期）
❶中国鏡	前漢連孤文鏡（下ガヤノキ）		○	○
	明光鏡（櫛エーガ崎）		○	○
	方格規矩鏡（塔ノ首4号）	○	○	○
朝鮮鏡	小形仿製鏡（タカマツノダンⅠ・Ⅱ、佐保赤崎、東ノ浜）	○		○
❷釧	太身（塔ノ首2号1、同3号7、下ガヤノキB2、糠ノ浜、黒木南鼻）		○	
	細身（ソウダイ、観音鼻2号）	○	○	○?
❸剣および付属金具	細形銅剣（吉田今宮、タカマツノダン、サカドウ、木坂6号、木坂7号、東ノ浜）	○	○	
	変形細形銅剣（佐護白岳、恵比須山6号、東ノ浜、シゲノダン）	○		
	鍔（ガヤノキB2、タカマツノダン、木坂7号、シゲノダン、佐保赤崎2号、黒木南鼻）	○	○	
	剣柄（木坂5号）	○		
	剣把頭（白岳、サカドウ、タカマツノダン、小姓島5号、恵比須山8号、キロスガ浜、シゲノダン3、唐崎）	○	○	
	鞘尻金具B（唐崎2、黒木南鼻、シゲノダン?）	○		
❹その他	有孔十字形金具（木坂5号、サカドウ、唐崎）			
	平環（仁田、サカドウ）	○		
	角形銅器（白岳、サカドウ、木坂5号、唐崎）	○		
	半球形飾鋲（タカマツノダン3、唐崎、東ノ浜）	○		
	馬鐸（佐保ソウダイ、シゲノダン）	○	○	
	笠頭付柱状金具（木坂5号、トウトゴ山1号、サカドウ、唐崎）			
	双頭管状金具（サカドウ、下ガヤノキ、木坂5号、唐崎）	○		
	不明銅器（サカドウ）			
	貨泉（シゲノダン）	○		○
❺容器	鍑（佐護クビル）		○	

〔註〕遺跡所在地
- 上県郡上対馬町（古里塔ノ首）
- 〃　上県町（佐護白岳、佐護クビル、仁田）
- 〃　峰町（木坂、三根タカマツノダン、サカドウ、ガヤノキ、吉田恵比須山、トウトゴ山、今宮、佐賀小姓島、櫛エーガ崎）
- 下県郡豊玉町（仁位東ノ浜、卯麦糠ノ浜、黒木南鼻、佐保キロスガ浜、ソウダイ、シゲノダン、唐崎、赤崎、曽観音鼻）

にすることさえ除けば、面径・字体・文様構成など前漢後半の連孤文「清白鏡」などと同類で福岡県三雲・須玖・立岩[3]などの弥生中期後半の国王クラスの甕棺から出土している。櫛エーガ崎出土の明光鏡も同様で[4]、福岡・佐賀県にまたがって5例の出土が知られているが[5]、土坑墓、甕棺、箱式石棺の貴重な副葬品として扱かわれている。弥生中期末から後期前半に及ぶものである。塔の首4号石棺の方格規矩文鏡は河南省洛陽焼溝漢墓[6]の第6型3式鏡に類似するもので後漢初期～中葉に相当し、塔の首では後期前半の土器と出土した。同時期に近い同型1式のものは佐賀県桜馬場[7]や福岡県五穀神社[8]から後期前半の墳墓に伴って出土し、3式に近いものは福岡市西新の箱式石棺から出土して[9]、前漢の鏡と同様に宝器としての有り方を示している。こうした北部九州での宝器としての扱いは、対馬でも同じの事らしく、エーガ崎では明光鏡に関をすりあげ、下端に二孔を穿った形式の新らしい細形銅剣が伴った[10]。この銅剣はタカマツノダン、東の浜と異なって、舶載の銅剣から発達して日本で独自に創出されたもので、銅剣副葬の末期的なものであるが北部九州と同じ思考のもとに副葬されたものと考えられる。

塔の首4号石棺に副葬された方格規矩鏡は石の間にすべり落ちた状態で棺の中央部から出土しているが、塔の首遺跡の2・3号石棺の副葬品の処理が宝器的であることからしても、この鏡は宝器として扱われたものであろう。

北部九州の墳墓と同様の扱いを受けたもので、はるばる平壌付近より入手した貴重品である。

対馬の小形仿製鏡は高倉洋彰氏によると[11]Ⅰ型とⅡ型にわかれ、Ⅰ型は朝鮮半島南部と対馬にだけ分布し、その製作地としては朝鮮半島に置くのが妥当としている。Ⅰ型はタカマツノダンに二画（3面中）、佐保赤崎、東の浜に各一面の四面が出土し、後期前半の時期に相当する。Ⅰ型の中で古式にあたるa類が慶尚北道の漁隠洞とタカマツノダンに出土し、最近では佐賀県二塚山46号甕棺（後期初頭）から漁隠洞に酷似するものが出土して、朝鮮半島製の小形仿製鏡が北九州に伝えられたことが判った。しかも甕棺の副葬品として、他棺出土の漢式鏡と同様に宝器的な扱いを受けている点からみて、対馬の小形仿製鏡も宝器としての価値を持っていたものといえる。この鏡は慶尚道や全羅道な

ど、朝鮮半島南部より将来されたものであるが、対馬・北九州で実用上の価値を持つため他の朝鮮青銅器とは別の扱いをうけている。

❷釧　これには細身と太身のものがある。細身は環体〇、二～〇、四センチ位で佐保ソウダイ、曽禰音鼻2号石棺に出土し、後期前半と後半のものとある。いづれも出土状態が不明のため着装されていたかどうかはっきりしない。北部九州では弥生中期に佐賀県宇木汲田遺跡[12]に出土しているが、この時期まで使われたかどうか明確でない。須玖のⅢ号土坑墓が後期に下降するものであれば可能性はある。[13]慶尚北道漁隠洞に類似のものが出土している。[14]

太身のものは環体〇、五～一センチで塔の首2・3号、下ガヤノキB、糠ノ浜、黒木南鼻に12個が出土しているが、塔の首を除いて出土状態は不明である。塔の首2号では胸から頭の位置にガラス玉や管玉が分布し、釧は被葬者の「ちょうど左手に装着していたことを示している」常態で出土した。3号も「銅釧は両側とも、それぞれ左右の腕の位置にふさわしい地点に、かつ腕を直ぐに伸ばしていたような方向で出土した」[15]とのことで、2・3号とも着装の状態を示している。右腕の2個には内側に、左腕の4個には外腕にそれぞれ布片が付着し、身につけた際の衣服の布が布着したか、包まれていた状態を示し、いづれにしても身につけるか、宝器的に扱かうかの丁重な処理の痕を残している。これら太身の釧は大同や黄州付近に見ることができ、特に下ガヤノキ例のような金銅張りのものは、北部朝鮮に出土している。鏡と同様で、平壌付近の遠隔地から将来されてきたもので、貴重品として扱っている。

❸剣および付属金具　銅剣には細形銅剣と変形細形銅剣、付属金具に鍔、剣柄、各種剣把頭と鞘尻金具がある。④と並んで普遍的な出土を見るが、これらは装着されて出土することなく、遊離して出土する。それについては後述するが、この点①②のように生きた道具としては使われていない。

細形銅剣　吉田今宮神社[17]、タカマツノダン、サカドウ、東の浜に出土。吉田例は不明であるが他は箱式石棺の出土。形式は森貞次郎氏のBⅡ式[18]、尹武炳氏のⅢ類[19]（のちに細形銅剣第Ⅱ式）で、いづれも細形銅剣としては後出形式の

ものである。サカドウは下端を失くしているがまずBⅡ式に間違いあるまい。北九州にはこの時期出土しない。

木坂7号石棺出土の銅剣は刳方や節帯がなく、鎬が茎端まで及ぶ形式で、いわゆる細形銅剣と形式を異にしている。森氏がC式とし、細形銅剣の退化形態としたものであるが、小田氏は遼寧式銅剣から分れた分派形式として、細形銅剣と併立して朝鮮半島―対馬―北九州に広がったものとした。[20] 同タイプの銅剣は南朝鮮の忠清南道、慶尚北道、慶尚南道金海会峴里D区にも分布し、南朝鮮から渡ってきたものとすることができよう。

変形細形銅剣　佐護白岳、東の浜、シゲノダン、恵比須山6号石棺に各1本の四本が出土し、慶尚南道金海に2本出土している。尹武炳氏は朝鮮半島南岸一帯に日本製の仿製利器の出土例が増えていることを背景に、対馬により多くこの銅剣が出土することから、対馬鋳造説を考えている。[21] 武末氏はこれに疑問をはさみ、対馬での鋳造での無意味さと、日本では別の形式の銅剣が流布していたことから、日本での鋳造を否定し、金海あたりでの鋳造を考えている。[22] 確かに大邱晩村洞や江原道付近出土と伝える銅戈には日本仿製品と区別がつかないものもあるが、金海で変形細形銅剣と一括品になるという二本の銅矛、[23] 同じく金海出土の姜陽洙氏蔵品（良洞里か）[24] の二本の銅矛は対馬や日本にもない銅矛で関の形式はこの四本共通した独特の特色を持っている。長さは四〇センチを切るものであるが鋒部は闊がり、樋の長さも短かく、また銅質もよくない。日本の仿製銅矛とは全く別物である。湯のめぐりも悪いため処々にすができて、儀器的銅器の特徴をよく示している。このことは南朝鮮で日本とは別に儀器的銅器が製作された可能性を示し、これと一括関係にある変形細形銅剣も銅質悪く、樋が短かく、かつ湯めぐりも悪い点など製作技術や樋の退化、銅質など類似するところが多く銅矛と同様朝鮮製の儀器の可能性が考えられる。飛山洞の銅戈にしてもそうだが、[25] いわゆる細形といわれた段階の後を受けて、朝鮮半島南岸部を中心とする地域に儀器化した銅剣・銅矛・銅戈の製作が独自に開かれていたものと見られる。変形細形銅剣の場合、武末氏もいうように日本製とすると情況的に説明が無理であり、氏がいうように金海付近にその根拠地があり、それが対馬に将来されたものといえる。

鍔　ガヤノキB、タカマツノダン、シゲノダン、佐保赤崎2号石棺、黒木南鼻、木坂7号に出土した。明らかに朝鮮製品である。朝鮮南部では大邱市飛山洞・晩村洞・済州島山地港に出土例がある。

剣柄　木坂5号石棺に唯一の出土例がある。鍔と剣柄が同鋳されたもので、これを調べた小田富士雄氏は慶尚北道慶州（京田大学校博物館所蔵）出土品と同笵品と断定した。[26]他に伝慶尚北道慶州、[27]慶尚南道金海に同型品が出土しており氏は慶州付近で製作したものと考えている。いづれにしろ、慶尚道あたりより将来されたものである。

剣把頭　8遺跡11個の出土例があり、白岳、小姓島5号、キロスガ浜、シゲノダン、唐崎、恵比須山8号は十字形でシゲノダンのうちの一例と恵比須山例には笠頭がつく。シゲノダン例は把頭の両端に一匹づつの獣がついているが、これは慶尚南道金海酒村面良洞里出土の剣把頭の両端に二匹づつの獣をつけたものと共通し、[29]岡内氏は南朝鮮で成立した把頭飾と考えている。[30]動物意匠を把頭や帯鉤にあらわす南朝鮮文化の表現といえる。

キロスガ浜出土品とシゲノダンの二例は粟粒文を持つ把頭金具で、これまで平安南道大同江面、[31]黄海北道葛峴里、[62]咸鏡北道洪原郡雲甫里[33]など北部朝鮮域に出土したので、朝鮮北部との交渉を説く人が多い。[34]把頭飾のみを単独に請来するのも不可思議に思っていたところ、慶尚南道三千甫市馬洞ドウン島で双頭管状銅器と共に出土したとの教示を得[35]把頭金具と南朝鮮との繋がりを把む事ができた。

タカマツノダン、サカドウには触角式剣把頭が出土している。いづれも別鋳式のものでサカドウのものは表現の硬化が進みカタマツノダン例よりも形式的に新らしい。この把頭飾の祖形をなすものは、慶尚北道大邱市飛山洞[36]に出土している。やはり別鋳式で平壌博物館蔵よりも表現が硬くなっているが、触角部の水鳥も一見してそれと判じることができる。タカマツノダンになると鳥の面影はないが目釘穴の左右の三角形の透孔など近似している。タカマツノダン・サカドウは飛山洞に後続する形式で、慶尚道付近よりもたらされたものである。

鞘尻　唐崎に二例の出土を見る。同タイプのものは慶尚南道金海、[37]慶尚北道大邱市飛山洞、同晩村洞[38]に出土して、

慶尚道付近に限られている。北部朝鮮には出土せず、岡内氏のいうB式である。[39]

以上剣及び付属金具を個別に検討してきたが、その出自は慶尚北道や南道の南部朝鮮地域に求めることができ、日本には出土しない。

❹その他の舶載青銅器　これに属するものは用途上相互に関連がなく、それ一個ではまた用途を完全にすることができない。しかも、そういう半端物がしばしば一括して出土することがある。また、使途が不明なものが多い。出土する時単数で出土する事も多い。

有孔十字形金具　十字形の中央に孔をめぐらし、孔を中心に稜形の文様で取りまき、脚の末端は綾杉状になる。湾曲中高の裏面には脚の中央を中軸として綾杉状の文様を入れる。サカドウ、唐崎、木坂5号に出土するも用途は不明で、朝鮮にも類品は出土していない。秋山進年氏はこの文様と八珠鈴の文様が関連するものと見ているが、[40]そうであれば、朝鮮南部に同類品が出土することが期待できる。

平環　サカドウと上県町の仁田に出土。前者は中央に穴のある楕円形の板状品で、孔を中心とした星形の文様とそれを埋める斜線文からなるが、全く同じ形と構図を持った類品が慶尚北道永川漁隠洞から出土した。漁隠洞では虎形帯鉤の掛金具に使われているが、[41]対馬に帯鉤は出土していない。

角形銅器　白岳、サカドウ、唐崎、木坂5号に出土。牛の角形をした銅器で角の先端部はカーブして細くなり把をなす。根元付近は中空で器物が挿入できるようになっている。装入物を固定するための目釘穴もある。この付近には併行斜線がめぐらされる。群馬県白石稲荷山古墳では鉄製刀子の柄に使われていたが、対馬では着装されて出土した例はない。古く出土した白岳例など、金海貝塚の鹿角製刀子柄と対比されてきたが、慶州出土と伝えられる牛角形銅器が韓国で確認されている。[42]形態はよく似る。特にうち一点は木坂、サカドウ、唐崎例のように把口付近に併行刻線文が巡らされ、密な関連品であることがよく判る。

半球形飾鋲　タカマツノダンに3個、唐崎と東の浜に1個出土。いづれも半球形状で方形・楕円形・蛙形のものはない。永川漁隠洞に類例があるが、唐崎例は文様まで類似している。革金具の中でも秋山氏のいう馬腹革帯に使われたのであれば、[43]対馬出土のものは少数にすぎる。

馬鐸　佐保ソウダイ、同シゲノダンに各一例出土。前者には銅舌が後者には鉄舌が伴なっていた。文様は前者は三区に分けた方形区画の中に各々三個二列の孔を、後者は斜格子状の区画の中に各一個の孔を多数陽鋳したものである。

外東面入室里の五個の馬鐸は[44]鋸歯状文と対角線文とで埋め入念なつくりを見せ、対馬のものも、これに共通する入念さを持つ。黄海南道殷栗郡雲城里の土坑墓出土の馬鐸は舌に穿上横文五銖銭を使い、表面には18個の乳を配しているが[45]つくりは粗く入室里のものと異なる。秋山氏は馬鐸を南朝鮮車馬具の特徴だと指摘し、音響具としての役割に変ったものとしている。[46]

朝鮮北部に出土するような車衡具や車軸金具などの車馬具は南朝鮮に出土せず、それが対馬にも反映して、馬鐸以外の車衡・車軸の車馬具は出土しない。この点からも対馬青銅器の系譜が南朝鮮地方にあることを指摘できる。

笠頭形金具　サカドウ、唐崎、トウトゴ山1号、木坂5号石棺に出土。用途不明の銅器で今のところ朝鮮半島に類例は見つかっていない。

双頭管状金具　キャップを二つ双頭状に合わせた金具で用途は不明。サカドウ、下ガヤノキ、唐崎、木坂5号に出土。朝鮮に類例がなかったが、慶尚南道三千甫市馬洞ドウン島に粟粒文把頭金具と出土した。[47]やはり、南朝鮮に祖形がある金具であることが判った。

以上の個別の検討から見て、❹の青銅器も南朝鮮に類例が多いことが判った。まだ不明のものもあるが、❹の青銅器は同一の遺跡に出土する事が多く、一括してもたらされた公算が多いことからも、朝鮮に類例不明の有孔十字形金

具や笠頭形金具も他例と等しく考えても間違いあるまい。北九州には出土しない。

❺鍍　佐護クビルで一例出土。金関恕氏は天理参考館蔵の平壌出土の鍍と比較し、合わせて中国、朝鮮出土例との関連から平壌付近で作られた可能性を考えられた。[48] それにしても本来の用途はともかく、対馬に運ばれた意味については不明である。

こうしてみると❶❷❺は北部朝鮮に系譜があり、❶❷は宝器的扱いをうけ日本に出土する。これに対し❸❹は南朝鮮に出自があり、一括性が強く、日本に出土しない。用途をまっとうした出土状態をしないがそれについては四章でのべる。

(b)対馬舶載青銅器と南部朝鮮・日本との関係

これまで述べてきたような対馬に舶載された朝鮮南部の青銅器、特に❸❹は朝鮮南部でいつ・どのような事情のもとに存在していたのであろうか。

日本および対馬での編年と関連づけながら概括してみたい。

慶尚北道では慶州九政里[49]に銅剣・銅矛、銅戈、銅鈴、銅鐸と素環頭太刀・鉄斧、鍬状鉄器などの鉄器が出土した。銅剣はBⅠ式、銅矛は岡崎氏の中細銅矛A[50](近藤氏のd)[51]、銅戈は岡内分類のⅢbロ式[52]である。

同じ慶州の坪里では[53]BⅡ式の銅剣、中細銅矛A類（d）、Ⅱaロ式の銅戈が伴い、銅矛は長四三・六センチである。

この組合せは日本では弥生時代中期の中葉前後に相当し、銅矛の仲びからいえば佐賀県汲田よりも時期が降り、福岡県須玖、同三雲一号甕棺の時期にあたる。[54] 前漢後半の直径17～18センチを測る大形の連孤文鏡が北九州に出現する時期である。

これらの遺跡に後続するのは慶尚北道では大邱市の飛山洞遺跡である。[55] 飛山洞には銅剣・銅矛・銅戈、その他の青銅器はじめ、多数の鉄器も含まれていたらしい。銅剣・銅矛・銅戈はいづれも前述遺跡よりも新らしい形式を含んでいる。銅剣は5本出土したが、うち3本は坪里と同様のBⅡ式のものである。残りの二本は通常のものより一本多い二本の血溝を持ち、刳りは浅く、それより下端の茎との間も直線状に仕上げられた新らしい特徴を持つ。この形式は森氏によってC式、尹武炳氏によって細型銅剣ⅡBとされたもので、いづれも細形銅剣の中でも最終末に置かれるものである。これは穿上横文であるかどうか最近再検討されている五銖銭を出土した黄海道黄州黒橋里出土[56]の銅剣と同じものである。

銅矛は二本出土したが長四〇・〇五センチと四六・七センチで岡崎氏はいづれも中細銅矛A類としている。前者は九政里や坪里と同じタイプであるが、後者はこのタイプの中でも最も長いものになって、坪里や九政里より後出するものであることが判る。また長鋒化したため、前者のように関から鋒まで一直線に鋭くとがらず、刃部の中央が三分の五程併行して走るまのびした形になり、わが国のこの後の段階に仿製品としてあらわれる中細銅矛B類に近づいている。儀器化の道を辿り始めたものといえよう。

銅戈は胡と内の角度が直角に近くなり、長さ19センチと伸びず小形であるが、身の中央で一段細まり、鋒先にかけて再び広闊になるという、わが国の仿製銅戈に共通する特徴を示して、ⅡaロやⅢbロよりも新らしい形式になっている。岡内氏はⅢ型式を「すでに刺突・斬殺の兵器として用を為し得ない形態になった」と指摘しているが[57]、本例はそれより更に退化した儀器的特徴を持ったものである。

以上のように飛山洞の銅利器は細形のものとしては最終段階に到達しており、すでに一部は儀器としての特徴を示し始めているといえる。

第３表　朝鮮南部・対馬・北九州比較表

	慶尚北道	慶尚南道	対馬	北九州	
前漢末	**九政里** （ＢⅠ銅剣・ｄ銅矛、鉄器） **坪里** （ＢⅡ銅剣・ｂ、ｃ、ｄ銅矛） **飛山洞** （ＢⅡ、Ｃ銅剣、触角式把頭飾、ｄ銅矛、中細銅戈、虎形帯鉤、鉄器） **漁隠洞** （虎形帯鉤、日光鏡、小形仿製鏡、半球形飾鋲平環）			**須玖** **三雲** **立岩** （内行花文連孤文鏡、日光鏡、鉄剣鉄矛、中細銅矛） **久里** （中細銅戈、中細銅矛）	中葉 中期末葉
後漢末	**晩村洞** （中広銅戈、ＢⅡ・Ｃ銅剣）	**良洞里** （方格規矩四神鏡、鉄剣鉄矛、獣付把頭飾） **金海一括** （変形細形銅剣、変形銅矛）	**シゲノダン**（貨泉、変形細形銅剣、獣付把頭金具、鉄剣、中広銅矛ほか） **タカマツノダン**（ＢⅡ銅剣、触角式把頭飾、小形仿製鏡、半球形飾鋲） **サカドウ**（触角式把頭飾、平環） **東ノ浜**（変形細形銅剣、ＢⅡ銅剣鉄剣、飾鋲） **塔ノ首**（広形銅矛） **木坂５号**（広形銅矛、剣柄、日本製仿製鏡、有孔十字形銅器ほか）	**二塚山Ｋ46** （小形仿製鏡、鉄矛） **桜馬場** （方格規矩四神鏡鉄刀）	後期前半 後半

この飛山洞で出土した虎形帯鉤は慶尚北道永川漁隠洞出土の虎形帯鉤と酷似するもので[58]、その時代の近さを想定させる。文様の表現に一部の相違はあるがその形姿は同巧のものである。北方系の動物文様の南朝鮮における影響はこの漁隠洞によってしばしば代表されるが、こうしたつながりは飛山洞の銅剣剣柄に装着されていたオルドス系の水鳥の表現を持つ別鋳剣把頭の南朝鮮での製作[59]と、この動物文様の出現と関連ありとする考えを[60]、可能的にする。

漁隠洞では、「見日之光、天下大明」一連孤文鏡を伴っているが[61]、この鏡は洛陽焼溝漢墓ではⅣ型一式とされ、前漢末から新王莽間に置かれている。日本では福岡県三雲二号[62]、丸尾台[63]、立岩34号[64]の甕棺に出土し、弥生中期末に伴うことが多い。佐賀県二塚山46号甕棺の小形仿製鏡[65]は漁隠洞の小形仿製鏡と酷似し、後期初頭の甕棺に伴っているので、飛山洞や漁隠洞は弥生中期末から後期初頭の間におくことができる。

またこの時期には、漁隠洞にみるように対馬もに出土する平環、半球状飾金具、などの❹とした青銅器が伴なう。

この後、慶尚北道では大邱晩村洞遺跡が後続する。銅剣、鞘金具、銅戈を出土するが剣金具以外の銅器は出土しない。銅剣は飛山洞と全く同じのBⅡ・C（尹氏のⅡ、Ⅱb）式である。銅戈は飛山洞よりさらに発達した九州の中広式に酷似するもので、日本の後期前半代に置くことができる。今のところこの段階で南朝鮮の銅器は終末期をむかえるが遺構の性格がわからないのは出土状態を知れなくて遺憾である。

一方慶尚南道の洛東江流域にも同時期の遺跡が知られている。金海の酒村面良洞里から鉄矛2、鉄剣2、方格規矩四神鏡、銅製剣把頭各一が出土した[66]。銅金具は剣付属品に限られている。方格規矩四神鏡は流雲文縁尚方作竟で形式、文様大きさともほぼ佐賀県桜馬場遺跡出土の同式鏡と通じるもので[67]、同時期の鏡である。王莽新代の作で日本では後期前半に伴う。一緒に出土した四獣付剣把頭は南朝鮮で成立した形式といわれるが[68]、双獣付剣把頭は対馬シゲノダンに出土し、これには貨泉、変形細形銅剣、鉄剣、中広銅矛その他が伴い時間的に合致する。この変形銅剣細形と同形式の銅剣2と銅矛2、鞘尻1、剣把が一括遺物として金海から[69]も出土した。貨泉は壱岐島原の辻で、後期前半

の土器に伴い、中広銅矛は対馬塔の首の後期中頃に伴った広形銅矛より推しても後期前半に比定しうるもので、この変形細形銅剣を出す金海一括遺物も後期前半に位置づけられ、良洞里とあまり変らない時期のものといえる。

ところでこの変形細形銅剣の製作地について朝鮮説と日本説（対馬）と二つあり、武末氏のいうように前者であろうことは前に述べた。それはこの形式のみならず中細化した銅剣そのものが北部九州に流布しない＝必要としないという情況証拠のみならず、一つは流布説の根拠となる福岡県三潴郡塚崎の銅剣と形式を異にしているように見える点である。塚崎例は長四〇数センチの長大化したものであるのに対し、変形細形銅剣は短いので30センチ（白岳）、他の金海、対馬出土例は35センチ前後にまとまっていて、細形銅剣の長さと変らない。こうした長大化しない傾向は金海で変形細形銅剣に共伴した銅矛が長大化しないことと軌を一にしている。更に、幅においても変形細形銅剣の方が塚崎に比べ関、樋の中央、樋の先端においても幅広にある点も異なっている。第三にこの種銅剣の銅質は銅の含有量が多く、湯の巡りが劣悪で、そのためスが多くできるが、シゲノダンで伴出した中広銅矛は質や鋳上がりにおいて上質であり、同工人の製作にしては技術に差がありすぎる。

金海で変形細形銅剣と共伴した銅矛は互いに共通点を持つ。第一に中細銅矛の中でも発達の極に達し、すでに儀器化が始まった飛山洞例に比べて長さはむしろ退化して短かくなるが、幅が広くなる。ついで関から鉾へは鋭く直線的に収束せず、併行な刃部が鉾へと続き、先端は円くなる。また樋が短くるたなめに樋先と鉾間が長鋒化するなど刃より先端までの形や樋の状況および鉾など変形細形銅剣に類似する。この面からも両者の関連性を証することができるが、以上の諸特徴はいうまでもなく儀器的特徴を示すもので、その表面は変形細形銅剣と同様に鋳上がりは悪い。変形細形銅剣と共に儀器として意識的に製作されたものである。

この銅矛と同形のものが二本ある。姜洙陽氏の所蔵品で、金廷鶴氏が良洞里出土としたものである。この4本の銅矛は明らかに儀器化したものであるが、日本出土の仿製銅矛とも別ものである。時期的に近い対馬シゲノダン出土の

中広銅矛と比べるとシゲノダン例は長七五・二センチと長さにおいて儀器化を強調しているのに対し、金海例は三七・四、他の一例は鋒を欠いて三二・五センチ、姜氏蔵品は一が三九・五で、他が三八・六でほぼ四〇センチ弱と短かい。これは坪里や飛山洞の中細銅矛A類（d式）に比べてもやゝ短かく、逆に横の広がりに儀器化の強調が見えて、日本品が長鋒化するのと対称的である。

形の上でも日本品は関の形成が関からその付根に緩い外弧を描くのに付し、これら銅矛は反対に内側に反って、さらにその端で一段置いて銎につながっている。また銎口部が左右にラッパ状に開くなど形式においても著るしい差がある。姜氏蔵品の一例には樋に綾杉文を鋳出している。[70] 日本には銅戈の樋に綾杉を鋳出することは通例でも銅矛ではありえない。以上の点から金海出土の銅矛を日本品と見る事は困難で、朝鮮で独自に創出された儀器と見なければならない。[71]

こうして岡内氏もいうように、[72] 朝鮮南部で独自の形式化・儀器化が始まったことを承知するわけであるが、銅戈については問題が残る。晩村洞例や伝江原出土と伝えるものは、形式においては日本の中広戈と何等かわるところはなく、またこれらは幅に膨大化すると共に長さにおいても朝鮮在来の銅戈と比べて長鋒化している点は銅剣・銅矛の場合と異なっている。慶尚北道では別ともいえるが、逆に別であるから日本産が伝わったとも言えるので、今は後に解決を残しておこう。

(c)再度対馬の青銅器について

中期末から後期初頭ぎりぎりの時期まで、朝鮮南部には❹の青銅器が銅剣・銅矛・銅戈などと共に使われていたが、後期前半になると❹類は急速に姿を見せなくなり、剣および鞘金具・剣把・把頭などの剣付属金具のみが残ってくる。それには従来の細形銅剣と剣付属金具を伴うもの（晩村洞）、変形細形銅剣と附属金具が伴うもの（金海一括遺

物）、鉄剣と伴うものの三種が残るが、金海付近では鉄剣と鉄剣の影響を受けた変形細形銅剣が主流となりつつあり、慶尚北道では晩村洞のように細形銅剣と付属金具で組み合っていたが、中広銅戈を伴なうように儀器化の波も押し寄せていた。金海付近では変形細形銅剣と並んで、銅矛も儀器化し始めているが、形式上これ以上の発達をみず、ほぼこの時期にて青銅器文化は終末したものといえる。日本のように中広から広形へと発展することはなかった模様である。対馬に朝鮮舶載青銅器があらわれるのは、頂度このように南部朝鮮で青銅器が終末をむかえ、一部儀器的青銅器の製作が開始される時期に相当する。

変形細形銅剣とこれと伴出した双獣付十字形把頭金具をだすシゲノダン遺跡、飛山洞の触角式把頭より後出形式の把頭飾やBⅡ式の細形銅剣を出したタカマツノダンやサカドウ、さらに変形細形銅剣とBⅡ細形銅剣、鉄剣を共伴した東の浜や変形細形と把頭飾を出土した白岳はこの時期に該当する。つまり❸とした銅器の大部分は、朝鮮南部青銅器文化の末期に流れ込んだものといえる。ところで❹は朝鮮ではもう一段古い段階に栄えたものであるが対馬では❸と共伴出土する。❹はすでに実用性を失い、後述するようにその出土状態も実用性を尊重したものではなく、かかるものが対馬で伝世するとは考えられない。何らかの事情で朝鮮南部で保留されていたものが❸と共に対馬に流入したものと考えることが出来る。即ち、朝鮮南部で不要[73]になった❹が、同じく青銅器の文化が終末をむかえ、不要となった❸と共に対馬にもたらされたものと考えることができる。従って対馬にこれらが出土する時、❶❷の宝器、装身具と違った特殊な出土状態を示す。以下、それについて述べてみよう。

【註】

（1）上県郡峰町下ガヤノキ、前漢連弧文鏡（弥生中期）

〃　〃　櫛エーガ崎、明光鏡、有孔細形銅剣（弥生中―後期）

〃　上対馬町塔の首4号石棺、方格規矩文鏡（弥生後期）

（2）九州大学編『対馬』長崎県文化財調査報告第17集、一九七四。

（3）青柳種信『柳園古器略考』東西文化社、一九三〇。
岡崎　敬「三雲・井原遺跡とその時代」『柳園古器略考』（解題）一九七六。
柳田康雄ほか『井原・三雲遺跡発掘調査報告』一九七五、一九七六、福岡県教育委員会。
島田貞彦『筑前須玖史前遺跡の研究』帝都帝大文学部研究報告、一九三〇。
岡崎　敬ほか『立岩遺跡』、一九七七。

（4）水野清一、岡崎敬ほか『対馬』東方考古学叢刊、一九五三。

（5）山崎純男『宝満尾遺跡』福岡市埋文報26集、一九七四に集成されている。

（6）『洛陽焼溝漢墓』中国田野考古報告集丁種六号、一九五九。

（7）杉原荘介・原口正三「佐賀県桜馬場遺跡」『日本農耕文化の生成』一九六一。

（8）高倉洋彰「福岡県碓井町五穀神社遺跡出土の方格規矩四神鏡」九州考古学41～44、一九七一。

（9）中山平次郎「古式支那鏡鑑沿革㈢」考古学雑誌九―三　一九一八。

（10）森貞次郎「弥生時代における細形銅剣の流入について」『日本民族と南方文化』一九六八。

（11）高倉洋彰「半島↕対馬↕北九州」対馬風土記8、一九七二。

（12）九州大学考古学研究室編「北部九州先史集落遺跡の合同調査」九州考古学29・30、一九六六。

（13）『福岡県須玖・岡本遺跡』福岡県文化財調査報告書29、一九六三。

（14）藤田亮策・梅原末治・小泉顕夫『南朝鮮に於ける漢代の遺跡』（大正十一年度古蹟調査報告第Ⅱ冊）、一九二五。
藤田亮策・梅原末治・小泉顕夫『朝鮮古文化綜鑑』一九四七。
朝鮮総督府『楽浪郡時代の遺跡』古蹟調査特別報告第四冊　一九二五。

（15）塔ノ首遺跡調査団「上対馬町古里・塔ノ首石棺群調査報告」註②所収。

（16）註（14）に同じ。

（17）註（4）に同じ。

（18）註（10）に同じ。

（19）尹武炳「韓国青銅遺物の研究」白山学報12号。一九七二。
尹武炳・岡内三真訳「韓国青銅遺物の研究」朝鮮考古学年報ＶＬ3、一九七八。
（20）小田富士雄「対馬峰町木坂新出の青銅器について」『対馬の考古学』一九七六。
（21）尹武炳・岡内三真訳「金海出土の異形銅剣・銅矛」九州考古学46、一九七二。
（22）武末純一「舶載青銅器について」註②所収。
（23）註（21）。
（24）国立中央博物館『韓国先史時代青銅器』一九七三。
（25）金廷鶴編『韓国の考古学』一九七二。
（26）註（20）に同じ。
（27）『青銅遺物図録』国立博物館学術資料集(一)　一九六八。
（28）註（21）（24）に同じ。
（29）朴敬源「金海出土青銅遺物」考古美術106・107、韓国美術史学会、一九七〇。
（30）岡内三真「金海良洞里出土遺物について」史林56―3、一九七三。
（31）註（14）に同じ。
（32）李進熙「新発見の土壙墓遺跡」考古学雑誌四七―一、一九六一。
（33）（32）に同じ。
（34）註2の武末論文あるいは「対馬」（長崎県報8）の岡崎報告。
（35）九州大学文学部考古学研究室に留学中の東亜大学校専任講師沈奉謹氏の教示によるもので、同島で電柱建設のため掘り下げたところ粟粒文把頭金具と双頭管状銅器が出土した。遺物は現在釜山市の東亜大学校博物館に所蔵されているとのことである。
（36）註（25）に同じ。
（37）註（21）（24）に同じ。
（38）金載元・尹武炳「大邱晩村洞出土の銅戈・銅剣」震壇学報29・30、一九六六。
西谷正抄訳「慶尚北道大邱市晩村洞発見の青銅器について」古代学研究51、一九六七。

(39) 註(30)に同じ。
(40) 秋山進午「楽浪前期の車馬具」『日本考古学の諸問題』一九六四。
(41) 註(14)に同じ。
(42) 註(24)に同じ。
(43) 註(40)に同じ。
(44) 註(14)に同じ。
(45) 李進熙「戦後の朝鮮考古学の発展」考古学雑誌四五―一、一九五九。
(46) 註(40)に同じ。
(47) 註(35)に同じ。
(48) 金関恕「天理参考館蔵の銅鍑と銅甑」朝鮮学報94、一九六八。
(49) 金元竜「韓国・慶北・九政里出土遺物について」考古学雑誌三九―二、一九五三。
(50) 岡崎　敬「青銅器とその鋳型」『立岩遺跡』所収、一九七七。
(51) 近藤喬一「朝鮮・日本における初期金属器文化の系譜と展開」史林25―1、一九六九。
(52) 岡内三真「朝鮮出土の銅戈」古代文化二五―九、一九七三。
(53) 註(25)に同じ。
(54) 註(3)に同じ。
(55) 註(25)に同じ。
(56) 註(14)に同じ。
(57) 註(52)に同じ。
(58) 註(25)に同じ。
(59) 註(30)に同じ。
(60) 千葉基二「触角式把頭銅剣の再検討」古代文化二五―九、一九七二。
(61) 註(6)に同じ。
(62) 註(3)に同じ。

（63）中原志外顕・石井忠・下條信行「福岡県丸尾台遺跡」『宝台遺跡』所収、一九七〇。
（64）註（3）に同じ。
（65）『二塚山遺跡群』佐賀県教育委員会　一九七七。
（66）註（29）（30）に同じ。
（67）註（7）に同じ。
（68）註（30）に同じ。
（69）註（21）に同じ。
（70）註（52）の金海良洞里出土として扱かわれているもの。
（71）『南朝鮮に於ける漢代の遺跡』に載る伝洒村面の銅矛は明らかに日本の仿製品であるが、註（24）の金東銖氏蔵の長57・4センチの銅矛は長さ、あるいは節帯と耳の関係からいって日本製品の規格からはずれている。朝鮮製の可能性がある。
（72）註（30）に同じ。
（73）金海付近で創出される質の悪い変形細形銅剣や銅矛は、これらの鋳つぶしによって作られたものかもしれない。

四、対馬朝鮮船載青銅器出土情況の特殊性

(a)剣と付属金具の場合

1、朝鮮の場合

対馬の船載青銅器の出土情況の特異性を語るには、朝鮮の青銅器の出土情況との対比が問題となるので、まず朝鮮での出土情況例に簡単にふれておこう。

台城里10号西棺（平安南道江西郡）(1)

長さ約二・三〇メートル、頭部幅〇・八、脚部幅〇・六メートルの長台形木棺の西縁中央部に剣は鉾を頭にむけて金銅蓋弓帽2、金銅環2の金銅製品と共に他の副葬青銅器や鉄器と分離されて置かれていた。剣はBⅡ式の細形銅剣で、漆ぬりの木鞘に収められ、その根元には青銅製の鍔が着装されている。剣把は木柄で、把頭には笠頭付十字形（岡内分類AⅢ）の把頭金具があった。把頭は少しずれているが、木柄腐敗時にはずれたもので本来着装されていたものとみて間違いない。

台城里8号墓[1]

ほぼ南北に向いた長方形土坑墓のど真中に剣は置かれていた。他の遺物は北側の壁沿いや、その北に30センチほど高くなった副葬区に分離集中されていた。ここには鉄矛などもあるが、剣やその付属金具は全くない。これは一〇号西棺でも同じで銅矛は分離され剣や剣付属金具とは一緒にされない。剣は鉄剣で、木鞘に収められ、その根元には銅製鍔が着装され、柄は木柄であった。

「夫祖歳君墓」[2]（平安南道平城市楽浪区貞柏洞）

遺物はすでにとりあげられていたため、台城里のように個別の出土状況はわからないが、角材がひと揃い敷かれた土坑墓中より出土したものである。「（細形銅剣は）本来木の鞘にはいっていたが、木はすでに腐りなくなって外側に被されていた平たい長鼓形の鋸歯文透彫金具、剣把頭等をはじめとして、一個体分の付属金具が残っていた。[2]」剣はBⅡ式、鞘金具はA[3]式で伝平壌出土の黄澳氏旧蔵鉄剣につけた鞘と同じものである。他に鉄剣もあり、その基部には銅剣と同形の鞘金具が坩められていた。剣はいづれも着装された状態で埋納されていた。

唐村[4]（黄海北道鳳山郡松山里唐村）

幅一・〇、長二・三〇メートル以上の長方形の木室墳の「南端やや東によって鞘におさめた有基式短剣が柄を北にむけて」置かれていた。銅剣に木鞘と木柄が残っており、銅製の付属金具はないが埋葬時には鞘や柄をつけることを

示している。南端には副葬区があり、その中には残余の土器が納められていた。

以上の例から判るように、朝鮮で剣が副葬される時、剣は他の副葬品と分離された丁重な扱いを受け、被葬者の身辺に副えられていた。その際剣は銅剣、鉄剣ともに鞘に収められ、鍔・柄・把頭金具が着装された状態で副葬されていることが判る。また附属金具が単独あるいは剣と分離されて埋納されること、更に剣数より多く付属金具が伴なう事がないことも明らかである。すなわち、剣と付属金具は正しく着装されて副葬される。

このような状態での埋納が正規の方法であったことは、発掘によらない採集品や収集品によっても追認することができる。

その諸例については岡内氏の表にまとめられている。[5] 伝平壌付近出土例は鞘金具、鉚、鍔、木柄、笠頭付把頭金具などの剣付属具がすべて揃い、着装鉄剣の代表的なものといえるが、他に北部朝鮮の伝貞柏里、平壌平川里出土例なども古くから知られている。

入手時にすでにバラバラになってはいたが一括遺物とされる黄海北道黄州郡黒橋里や平安南道美林里例[6]も本来は着装された状態で埋納されていたと認めてよかろう。

朝鮮南部に出土状態を明らかにして出土した着装剣例はないが、収集品とはいえ飛山洞例は着装して埋納されていたことを示す好例である。[7] 同遺跡は剣5、矛2、戈1のほか虎形帯鉤、蓋弓帽などを同時に出土し、一括埋納品であることを示しているが、5口の剣のうち二口には着装剣が出土した。一例は触角式把頭を持つ剣で、同把頭と銅製剣把、文様ある鍔が着装されている。BIIの剣身には木部はないが5個の鞘金具が着けられている。先端に付く鞘尻は晩村洞、金海一括、対馬の唐崎出土品と同形で岡内氏のBにあたり[8]南部朝鮮の特色を示すものである。他の一例は樋に二条の血溝のある終末式の銅剣で把頭金具、鍔金具、鉚と鞘金具が伴っていた。

伝慶州出土と伝える国立博物館蔵の銅剣にも[9]有文の鉚と鍔と把が同鋳の剣把を伴って、もともと剣には付属金具が

着装されていたことを暗示させる。

晩村洞では三本の細形銅剣と4個の鞘金具、鍔、把頭金具が出土している。[10] その組合せは飛山洞の後者の例と似ており、共伴のどれかの銅剣に伴ったと考えることができる。鞘金具はB式で朝鮮南部に特有のもので、この点も飛山洞によく似ている。

以上のように、朝鮮南部も北部と同様に剣には鞘金具、鏃、鍔、柄、把頭飾が着装されて、埋葬あるいは埋納されていたことがわかる。しかもその時期は飛山洞や晩村洞例に見るように、日本の弥生中期末から後期前半の時期に通例であったことを知ることができる。

2　対馬の場合

これと同じ時期、対馬ではどうであったか。

対馬には遼寧系の銅剣を含めて細形銅剣6、変形細形銅剣4が出土している。この内、銅剣のみ単独で出土したものもあるが、剣付属金具と共伴出土した例もあり、後者を拾うと左のようになる。

タカマツノダン　細形銅剣1　鍔1　触角式把頭1

サカドウ　細形銅剣1　触角式把頭飾1

木坂6号　遼寧系銅剣1　鍔1　（鉄剣1）

シゲノダン　変形細形銅剣1　鍔1　把頭飾3（鉄剣2）

白岳　変形細形銅剣1　把頭飾1

10例のうち5例に剣と付属金具がともなっている。他に小姓島5号石棺には鉄剣1と把頭金具1が出土した。この表を見ると対馬も朝鮮と同様に付属金具を着装して副葬ないし埋納されたように見えるが、単純にそのように断定できるのであろうか。共伴と着装は必らずしも一緻せず、出土状態の検討が必要となる。この6例のうちタカマツノダン、

サカドウ、白岳の三例は出土状態は判らない。

小姓島例は鉄剣と把頭が出土位置の高さに30センチの開きがあり、把頭の出土状態はプライマリーなものとも思えないので、着装の当否は論ぜられない。

木板6号石棺は板石を組み合わせた箱式石棺で銅剣・鉄剣・鍔は東側の長側壁の外に出土した。その部分には更に外側から一枚の石を充ててこれら副葬品を保護していたらしく「金属器は3点とも一緒に側壁に守られた格好で出土した。しかも銅剣と鉄剣はわざと折ってあった。銅剣は二つに折って重ねてあった。[11]」鍔は二つに折って折り返した銅剣の茎と反対方向に出土した。

棺が西に傾斜する時、副葬品もそれにつれて移動しているが、保護石が利いて「二つに折って重ねた状態」に変動はなかったらしい。

傾斜も茎から鉾にかかっているので、鍔が着装されたものであれば、さらに剣に喰い込む筈である。そうしてみると、この剣と鍔は着装した状態では副葬されなかったものと考えられる。

シゲノダン遺跡[12]も正式な発掘がなされたわけではないが発見者の話しによれば中広銅矛を中にして銅器と鉄器に配置がわかれ、銅器群には変形細形銅剣、剣把頭・馬鐸などが出土した。変形細形銅剣の茎のすぐ下の本来剣把が位置する場所には鉄鉾があり、粟粒文の剣把はそれより10センチ近く横にずれ、しかも十字面を平面にして、二個並列されていた。双獣付把頭金具は銅剣よりさらに遊離し、間に粟粒文把頭金具がはさまっている。しかも剣は併行な状態におかれている。良洞里のように、鉄剣と伴なう可能性があったとしても、鉄剣との間には中広銅矛が挟まり、方位も一八〇度反対方向になっていて、銅剣、鉄剣ともに着柄された状態にあったとは考えられない。破片になった鍔もあるがこれの出土位置については判らない。

以上のように対馬で出土する細形銅剣と剣付属金具の間には朝鮮での両者のように装着されて埋納されたとは認め

難い証跡がある。従って、タカマツノダン、サカドウや白岳の場合においても、簡単には着装されていたとはいえず、装着されたと考える積極的証拠に乏しい。シゲノダンや木坂の例ではむしろ着装されていなかったという方が妥当であろう。

こうした考えは次のような諸例からも可能性あるものとすることができる。

1 剣把頭飾金具だけが出土する例(13)

恵比須山8号

2 剣柄だけが出土する例(14)

木板5号

3 剣把頭と鞘先金具が出土する例(15)

唐崎

1の恵比須山の笠頭付把頭金具は単独の出土で他に銅剣、鉄剣は出土していない。石棺は半壊されてはいるが、把頭飾の周囲には遺物はなく、把頭飾も小口と長壁とのコーナーに「正常な状態で発見された」。つまり着柄に不可能な平面十字の笠頭が起ち上がった状態での出土で、対馬ではこれが「正常な状態」であるかもしれない。

2は石棺の片隅に折った状態でなげこまれていたが、まとまって出土した銅器の中に剣は含まれていない。同一棺内に出土した鉄器は角形土器、管頭形銅器、仿製鏡、有孔十字形銅器、双頭キャップ状銅器、広形銅矛などがある。鉄剣は棺外に副葬されていた。

3の唐崎では鞘尻金具2と剣把頭1と剣とは無関係の青銅器類が一括して積み上げられていた。しかもこの両者は後述のように接触するような近さに出土し、個数も整合的でない。こういう出土の仕方であるから鞘尻金具と把頭がセットとして着装されたということは全く考えることはできない。

以上3つの付属金具の無着装、単独出土例をとりあげたが、他に黒木南鼻の鞘尻金具、や糠の浜の把頭飾もこれらに類する可能性を持ち、出土例も増加の傾向にある。

このような次第で、朝鮮では剣やその付属金具は着装されて、各々が本来の正常な状態で出土するが対馬では各付属具は分離され、本来の役割を喪失して、単なる銅ないしはそれの集積体として埋納、埋蔵されている。こうした特徴は剣や付属金具だけにとどまらず以下の銅器にも認められる。

(b)その他の銅器の場合

その他とは❹を指す。有孔十字形金具、平環、角形銅器、半球形飾鋲、馬鐸、笠頭形銅器、双頭管状金具が相当する。

用途上のことからいえば平環はあるが帯鉤はなく、半球形飾鋲が馬腹帯の飾とすれば、タカマツノダン3、東の浜1、唐崎1とあまりに遺跡での出土量は少ない。角形銅器の内部に刀子およびそれ以外のものでも拵装された例はない。笠頭柱状銅器は坂田氏によれば[16]柱に直角につく爪が物によって逆むき（木坂5号は時計廻り、唐崎、トウトゴウは反時計方向）に着くことから対で使われる可能性を指摘した。そうであれば対馬の出土例はいづれも一個づつで役にたたない片個である。この外、用途は明らかにしがたいが有孔十字形金具にしろ、双頭管状金具にしろ、本来何かに取付けるか、装入するかによって用を足したはずであるが、共伴物の中にはそれらを物語る証跡はない。つまりこれらの品々も、剣付属品と同様に朝鮮南部で使われていた時の役割、生命を喪失し、機能を果たすことのできない単なる銅の塊になってしまっている。

そのことは、次のような出土情況からも説明できる。

(c)銅材としての集合

唐崎遺跡は昭和41年度の夏永留久恵氏らによって調査されたが、棺の2分の1強は底まで掘り尽くされていたが、残余は高さ十五センチ前後で土が残されていた。この土は未掘のもので、硬い土であった。小口に向かって掘り進めていくと小口壁に沿って土器と一群となった銅器群が出土した。その状態は壁に近く角形銅器が把部を上にしてたてかけられそれに接してすぐ前面に一群の銅器があった。一番上に有孔十字形金具、その下に笠頭付柱状金具があり、さらにその下部には十字形把頭が飾部を上にして置かれその左と下には鞘尻金具が二個その右には双頭管状銅器、半球形飾鋲が一纏めに積みあげた状態に置かれていた。[17]

これは遺物相互に用途上の関連も、また使用上の機能性も喪失した状態での出土で、銅器は寄せ集めの自然状態の銅となって棺の隅に集積されたことを示している。もともと使用時にこれらに付着・挿入されていた木や鉄はとり外され、銅の部分のみを銅屑として寄せ集めたものである。そしてこの中には当時利用価値の高い鉄器は意識的に含ませていない。

この鉄を除外し銅のみを集めるやり方は木坂5号石棺でも認められる。この石棺の遺物は銅・鉄を問わずすべて意識的に折られたもので、その後棺内に投げ込まれたように集積されるが、一番多く集まっているのは北コーナー附近である。ここには角形銅器、笠頭付柱状銅器、双頭管状銅器、有孔十字形銅器、剣柄など銅器のみが集められ、鉄器は含まれない。鉄器は棺中央の床下と棺外に鉄刀子、鉄鏃、鉄剣が配され、銅とは共存しない。銅は鉄から隔離されて棺の隅に一ケ所にまとめられている。この銅群の中に日本産の広形銅矛や小形仿製鏡が一体として集められ、朝鮮銅器と日本銅矛が密接な関連にあることを物語っている。

シゲノダン遺跡の出土情況も同様である。既述のように中広銅矛を中心とし、片側に鉄器を一方に銅器だけをまと

めて配している。これは唐崎や木坂と同じケースである。そしてその境界をなすのは国産の銅矛である。

弥生後期の時代は朝鮮では銅から鉄への切替の時代で、日本も鉄器の時代であった。魏志韓伝弁辰の条にいうように「国出鉄、韓、濊、倭皆従取之。諸市買皆用鉄、如中国用銭、又以供給二郡。」状況で、当時最も一義的に必要としたのは鉄器であった。対馬の海民は当然これを倭に送ることによって生活の糧を得ていたに違いない。こうした鉄の価値を知った対馬人はやはり対馬の社会の中でもそれを重要視し、小姓島や木坂で見られるように墳墓の中に、鉄剣や刀子などを貴重品として一本、二本とその中央に副葬した。その扱いは、北部九州の墳墓の場合と同じである。

それに比べて、本稿で取りあげてきた朝鮮舶載の青銅器は、用をなさない屑として、しかもある程度量をまとめて、貴重な鉄器とは意識的に区別して、棺の隅や小口に乱雑に寄せ集められている。鉄器と比べる時、銅は宝器性をほとんど示していない。こうした出土状態のみならず、時代の趨勢としても、舶載青銅器が銅器としての役割を持ちえぬことは明らかなことである。しかしながらこれら銅器が木坂やシゲノダンに見るように国産の銅矛等と密着して出土する時、この銅器は存在の意義を新たにする。銅器はそれそのものとしては何の役割をも果たしていないが、銅矛に姿を変えた時、当時の社会にとって重要な意味を持ってくる。すなわち、対馬海人の手で北九州に送られ、国産銅器の原料になることによって、鋳つぶされて再生し、そこではじめて鉄と同様の価値を持ってくる。対馬の舶載青銅器はいまだ原料の段階で、北部九州への輸送を待期している状態にある。ここに対馬出土舶載青銅器の半端で、特殊な出土状態の原因がひそんでいるものと思われる。

【註】

（1）朝鮮科学院研究所『台城里古墳群発掘報告』一九五九
李進熙「戦後朝鮮考古学の発展」考古学雑誌四五―一、一九五九。

（2）李淳鎮「〈夫租蔵君〉墓について」考古民俗一九六四―四
永島暉臣慎・西谷正訳「〈夫租蔵君〉墓について」考古学研究14―4一九六八

第1図　唐崎遺跡の遺物出土状態　（永留久恵氏提供）

(3) 岡内三真「金海良洞里出土遺物について」史林56―3、一九七三。
(4) 李進熙「戦後朝鮮考古学の発展」考古学雑誌四五―一、一九五九。
(5) 註(3)。
(6) 藤田亮策・梅原末治・小泉顕夫『南朝鮮における漢代の遺跡』大正十一年度古蹟調査報告二冊　一九二五。
藤田亮策・梅原末治『朝鮮古文化綜鑑』一　一九四七。
(7) 金廷鶴編『韓国の考古学』一九七二。
(8) 註(3)。
(9) 『青銅遺物図録』国立博物館資料集(一)　一九六八
(10) 金載元・尹武炳「大邱晩村洞出土の銅戈・銅剣」震壇学報29・30号、一九六六。
西谷正「慶尚北道大邱市晩村洞発見の青銅器について」古代学研究51、一九六八。
(11) 坂田邦洋『対馬の考古学』一九七六。
(12) 森貞次郎ほか『長崎県対馬』長崎県文化財報告8、一九六九。
(13) 坂田邦洋・永留史彦『恵比須山遺跡発掘調査報告』長崎県峰町教育委員会、一九七四。
(14) 註(11)。
(15) 註(12)。
(16) 註(11)。
(17) 『対馬の美術展』図録　福岡県文化会館、一九七八。

五、おわりに

弥生後期になると対馬には朝鮮から舶載した青銅器が西海岸を中心にして、突然顕著になってくる。それらには種々の品々があるが、平壌附近より持たらされた漢式の鏡や釧は宝器的、実用的扱いを受ける。他方南朝鮮より将来されたものは、小形仿製鏡が鏡としての扱いを受けるのをのぞくと、主要な量を占める銅剣とその付属金具、その他の

小件の銅器は朝鮮や北九州にない特殊な出土状態を示して北朝鮮経由のものと異なった扱いをうける。その特徴は機能性を喪失し、銅器としての利用価値がない単なる銅塊になっているところにある。

墳墓に納められても当時最も重要視された鉄器とは峻別され、棺の隅に積み上げられたり、本来組合って機能を果たすものが個別に遊離して納められて、宝器的な姿を残していない。ところが出土にあたっては国産銅器と親縁な関係で出土することが多く、国産銅器と有機的な関連が考えられる。こうした出土状態[1]から、対馬の舶載銅器は国産銅器の原料である可能性を考えた。そうすると、特殊な出土状態の意味も解釈できる。

弥生時代の国産銅器が鋳つぶしであるとは古くから提言されてきたことではある。最近自然科学からの追求はこの可能性を証言しつつある。[2]

だが、まだ対馬と北九州の間のそういった関係は情況的であって、具体的でない。北部九州では銅の鋳造工房も出土していない。これからの問題も多い。

【註】

（1）対馬に多量に出土する銅矛はこれらが原料に使われ、一部はその見返りとして将来されたと考えている。ことに墳墓や埋蔵遺構など対馬人に関連深いものには、その可能性が強い。日本の銅器全体がこのケースによったかどうか、近藤喬一氏の批判もあるように（「朝鮮・日本における初期金属器文化の系譜と展開」史林五十二―一　一九六九一）朝鮮青銅器の総量と日本青銅器の総量との間には開きがありすぎる。

（2）山崎一雄ほか「日本産方鉛鉱および考古遺物中の鉛同位体比」日本化学会誌　一九七八　№8。

銅鐸、銅鏃、銅矛中に含まれる鉛は日本産以外の鉛が原料としていた可能性を示唆していると指摘している。